

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：47701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370261

研究課題名(和文) 地方における文芸コミュニティの形成と変容に関する研究 暮鳥会寄託資料を軸として

研究課題名(英文) Study on formation and transformation of literary community in rural area, based on documents deposited with Bocho-kai

研究代表者

竹本 寛秋 (Takemoto, Hiroaki)

鹿児島県立短期大学・文学科・准教授

研究者番号：20552144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：暮鳥会寄託・寄贈資料について、群馬県立土屋文明記念文学館所蔵資料との関係を明らかにし、山村暮鳥自筆資料の総体について明らかにした。山村暮鳥の詩集について、草稿レベルからの検討により、成立過程を明らかにした。山村暮鳥初期の活動が、地方の文芸コミュニティにどのように影響を与えたか、秋田県での事例を初めとして解明し、没後の顕彰活動について、群馬県での事例を初めとして解明した。山村暮鳥の全集未収録・新資料を翻刻し、公開すると共に、それら資料の時代背景を考察し、地方における詩のコミュニティの中での山村暮鳥の位置を明らかにした。山村暮鳥デジタルアーカイブを作成し、山村暮鳥の自筆資料をウェブ上で公開した。

研究成果の概要(英文)：From the draft level, the formation process of the poetry of Yamamura Bocho have been revealed, based on examining the whole contents of documents deposited with Bocho-kai and Gunma prefectural museum of literature in commemoration of Bunmei Tsuchiya. I clarified how Yamamura Bocho's early activities influenced local literary communities, including cases in Akita prefecture, and how he was honored after death from the case in Gunma prefecture. I typed handwritten materials that are not included in the complete collection of Yamamura Bocho. And I examined the historical background of these materials and clarified the position of Yamamura Bocho in the local literary community. I published the Yamamura Bocho digital archive on the web.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 生成研究 調査資料翻刻 資料画像デジタル化

1. 研究開始当初の背景

山村暮鳥(1884-1924)は明治末から大正末にかけて活躍した詩人である。従来の研究は、和田義昭による伝記研究のほかは大半が詩集『聖三稜玻璃』(1915)研究に集中し、萩原朔太郎の詩的言語との関係の中で、言語実験としての前衛性を評価するものがほとんどであった。

一方で、山村暮鳥は宣教師として秋田県、宮城県、福島県、茨城県の各地を巡りながら中央詩壇、地方詩壇の双方で活動した詩人であり、中央詩壇と地方詩壇の関係を明らかにする上で重要な視座を与える位置にいる。地方詩壇においては、1910年より『仙台日々新聞』『秋田魁新報』の詩欄の選者を務め、中央詩壇においては1913年から『秀才文壇』、1915年より『新評論』の詩欄の選者を務めている。また、1920年には病気の暮鳥に対する経済的支援を目的として「鐵の靴会」が発足するほか、没後の1933年には顕彰団体として茨城県に「暮鳥会」が成立する。「暮鳥会」は文学者の顕彰団体としてはかなり早い時期に成立し、現在に至って活動を続けている。こうした団体をはじめ、地方における文学者を取り巻くネットワークの中で山村暮鳥を捉え直すことにより、地方での文学の創作と流通と享受の構造を具体的に明らかにすることができると思定できた。

さらに、山村暮鳥の顕彰団体「暮鳥会」に寄託・寄贈された資料は、山村暮鳥の遺した草稿や創作ノート、創作メモ、書簡、写真、蔵書、遺品などを含み、資料的価値が極めて高いものを多く含んでいるにもかかわらず、検討が進んでいる状態になく、早急に整理し、検討および適切に公開する必要があった。また、これら資料は暮鳥生前のものだけでなく、山村暮鳥没後の詩碑建碑資料や、毎年の命日に行われた句会の資料、地方文芸誌、暮鳥会の成立に関わる資料など、現在に至る地方文芸資料を多数含んでおり、山村暮鳥を慕う人々のコミュニティの動静を伝えるものとなっている。そのため、地方における文芸コミュニティの実態を長いスパンにおいて明らかにし得る資料となっている。

本研究は以上の前提を踏まえ、暮鳥会寄託・寄贈資料の検討を中心として、地方における文芸コミュニティの様態を明らかにするとともに、暮鳥会寄託・寄贈資料の画像データベースを作成し、一般に利用しやすい形で公開することを目指した。

2. 研究の目的

(1) 山村暮鳥の草稿、創作メモなど自筆資料の翻刻及び検討を行い、山村暮鳥の創作活動について、キリスト教文化の受容、西洋文学の理解など、山村暮鳥の創作に関わる検討を行う。

(2) 山村暮鳥が牧師として赴任した秋田県、宮城県、茨城県、福島県での活動と地方の文

芸コミュニティとの関係を明らかにすると共に、山村暮鳥没後における暮鳥顕彰と地方文化の関係を明らかにする。

(3) 暮鳥会に寄託された資料の撮影を行って画像データベースを作成し、日本近代詩研究における資料として一般に利用しやすい形で公開する。

3. 研究の方法

(1) 山村暮鳥寄託資料について、資料の撮影を行い、翻刻を行う。

(2) 地方新聞、地方雑誌の収集と検討を行い、山村暮鳥の活動した地方の文芸コミュニティの状況を明らかにする。没後資料の分析から、1930年代から1940年代にかけての地方文芸コミュニティの状況を検討する。

(3) 山村暮鳥自筆の草稿、創作ノート、説教メモ、書簡などの分析から、山村暮鳥の創作の背景を解明する。

(4) 撮影した資料のデータを、公開に適したフォーマットを利用してデータベース化する。

4. 研究成果

(1) 山村暮鳥の自筆資料は、現在三つの場所に分有されている。一つ目は暮鳥会に寄託されたものであり、茨城県立図書館で保管されている。二つ目は暮鳥会に寄贈されたものであり、暮鳥会幹事で、本研究の研究協力者である加倉井東が暫定的に保管している。三つ目は群馬県立土屋文明記念文学館が所蔵するものである。これらは歴史的経緯で各場所にあるが、互いに連携する資料であり、各資料を相互に関連させた成果は従来ほとんどなかった。

本研究では、分有された資料類の位置づけを確定することで、山村暮鳥資料の基礎を築いたと考えられる。

その成果の一つが発表論文「『榎の聲』とは何か ―山村暮鳥『雲』巻末詩をめぐって―」であり、詩集『雲』と詩集『月夜の牡丹』の成立を、草稿レベルから明らかにしたものである。草稿・浄書原稿などの推移をたどることにより、詩集『雲』における編集意識が明らかにされた。同時に詩集『雲』から除けられたものの質が明らかにされ、拾遺詩集としての『月夜の牡丹』の位置が明らかにされた。

また、他の資料についても多数の発見がなされた。一例としては、土屋文明記念文学館所蔵の「名刺」に分類された資料の一部が、暮鳥会寄託資料の「説教メモ」にあたるものであることが判明したことなどである。こうした発見をはじめとして、山村暮鳥資料の全体像を総合的に明らかにすることができた。

その前提の上で、今後解明すべき課題につ

いて、雑誌論文 や で提示することができた。

(2) 山村暮鳥初期の活動が、地方の文芸コミュニティにどのように影響を与えたか、秋田県での事例を初めとして具体的に解明した。

雑誌論文 「朔太郎・暮鳥の詩的出発をめぐって」に代表されるが、『秋田魁新報』の詩欄の分析を通して、山村暮鳥が秋田の文芸コミュニティに影響を与え、「新印象詩」と呼ばれる詩が一定の広がりをみせたことが明らかになった。「新印象詩」は、中央詩壇における『早稲田文学』や『自然と印象』の影響の元に発想されたと考えられるが、山村暮鳥が紹介者となり、中央詩壇の思潮が、変形を受けつつ地方詩壇に波及した様態が明らかになった。同時に、「新印象詩」といった山村暮鳥の初期活動が、その後の詩集『聖三稜玻璃』とどのようにリンクするのか、さらには、萩原朔太郎などの詩とどのように影響関係を取り結ぶのか明らかにすることができた。

没後の顕彰活動についても、群馬県での事例を初めとして解明することができた。

(4) 山村暮鳥の全集未収録・新資料について主要なものを翻刻し、活字化して公開した。翻刻と同時に、それら資料の時代背景、同時代的意義を考察し、秋田県や茨城県における詩のコミュニティの中での山村暮鳥の位置を明らかにすることができた。

雑誌論文 「翻刻 暮鳥会寄贈資料・山村暮鳥自筆詩草稿」では、全集未収録の詩を含む自筆詩の草稿を翻刻し示した。雑誌論文 「新資料 山村暮鳥『雲』「序文」原稿及び関連資料(暮鳥会寄贈資料)・翻刻」では、山村暮鳥の詩集『雲』の序文原稿が三種類あることを紹介し、その生成過程を示す資料を提示した。

雑誌論文 、 では、全集未収録の序文原稿を翻刻して紹介したが、 では、童謡集『虹とさくらんぼ』の序文が示す暮鳥の童謡観を明らかにするとともに、茨城県の教育団体と山村暮鳥のつながりが明らかになった。

(5) 山村暮鳥デジタルアーカイブを作成し、山村暮鳥の草稿・原稿・自筆資料をウェブ上で公開した。本データベースにおいては、単にデータを公開するだけでなく、解題を付すことによって各資料の位置づけを明らかにしている。

データベースは今後公開の対象を広げ、拡充していくことになる。

以上の成果を通し、今後の山村暮鳥研究及び日本近代詩研究にとっての基礎的な交通整理をすることができた。「説教メモ」などは、従来考えられてきた以上の広がりを持つことが確認されたため、さらに詳細な検討が

必要となる資料であることが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

竹本寛秋、「榎梓の声」とは何か —山村暮鳥『雲』巻末詩をめぐって—、群馬県立土屋文明記念文学館紀要「風」、査読無、第19号、1-18、2016

竹本寛秋、新資料 山村暮鳥『雲』「序文」原稿及び関連資料(暮鳥会寄贈資料)・翻刻、雲、査読無、第21号、36-45、2016

竹本寛秋、「朔太郎・暮鳥の詩的出発をめぐって」、竹本寛秋、前橋文学館報、査読無、第43号、48-69、2016

竹本寛秋、記憶の記録としての『遠望』、遠望、査読無、第48集、41-43頁、2016

竹本寛秋、山村暮鳥の自筆資料をめぐって —草稿、創作ノート、説教メモ—、日本近代文学、査読有、第92集、138-145、2015

竹本寛秋、新資料 山村暮鳥「小説『春』序文」(暮鳥会寄贈資料)・翻刻と解説、鹿児島県立短期大学紀要(人文・社会科学篇)、査読無、第66号、21-27頁、2015

竹本寛秋、新資料 山村暮鳥『虹とさくらんぼ』序文原稿および関連資料(暮鳥会寄贈資料)・翻刻と解説、人文、査読無、第39号、1-7、2015

竹本寛秋、翻刻 暮鳥会寄贈資料・山村暮鳥自筆詩草稿、雲、査読無、第20号、20-39、2015

竹本寛秋、暮鳥会資料が拓く可能性—山村暮鳥生誕130年、新たな暮鳥研究へ向かって、雲、査読無、第19号、47-51、2014

〔学会発表〕(計3件)

竹本寛秋、朔太郎・暮鳥の詩的出発をめぐって、前橋文学館開館記念月間記念講演会、2015年9月13日、前橋文学館(群馬県前橋市)

竹本寛秋、暮鳥会資料の画像化、その成果と課題、山村暮鳥生誕130年没後90年記念講演会、2014年12月13日、茨城中学・高等学校(茨城県水戸市)

竹本寛秋、日本近代詩のなかでの山村暮鳥、第86回企画展「生誕130年記念展 山村暮鳥 そして『雲』が生まれた」記念講演会、2014年11月3日、群馬県立土屋文明記念文学館(群馬県高崎市)

〔その他〕

ホームページ等

山村暮鳥デジタルアーカイブ

<http://bocho.jpn.org/archive/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

竹本寛秋 (TAKEMOTO, Hiroaki)
鹿児島県立短期大学・文学科・准教授
研究者番号：20552144

(2)研究協力者

加倉井東 (KAKURAI, Azuma)
浅井敦 (ASAI, Atsushi)